昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十年一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第七十号）

慈光

第七卷　第一號

目次

如来常住の声……近角常観…（1）
長生不死の神方……花田正夫…（2）
願成就文に就いて……福島政雄…（6）
自然法爾（一）……自在丸新十郎…（9）
名といのち……榊原徳草…（13）

如來常住の聲

近角常觀

人生に変化は多い。その変化の多い人生を通じて、永久変らないものは如来の常住である。釈尊入滅の時『如来の色身は滅すも法身は滅せず、如来は常住にして変易あることなし』と仰せられた教訓自身が、之を証して余ありといふべきである。

我等の短き人生に於てすら、如来の声の常住にして変化なきことを認むることが出来る。種々変化多き社会現象の中に、如来の教の始終を通じて、永久不変なることを実証さるものである。

吾人は種々のはからひをなし、種々の思慮を費し、変化流転の人生に対して、浮沈極なき生活を経来れども、其間を通じて、如来の大法の毫もゆるぎなき、大磐石の如きを仰ぐときは、如何に如来常住の尊きかを知ることが出来る。

我等は護法の精神を以て大法を護持すると考へる、併し持するのでなくして、護持せしめられたのである。否護法の精神それ自身すらも、大法自身の精神である。如来常住の声自身の現れに外ならぬ。

親鸞聖人が教行信証に於て、特に涅槃経を引用して最も愛読したまひた所以も、実に尊き極みである。特に『我れ阿闍世王の爲に涅槃に入らず』の一語は、実に甚深微妙である。

『阿闍世王』とは煩悩具足の我等である。五逆の悪人である。現代の世相、みな阿闍世王たらざるはなく、王舎城の悲劇たらざるはない。しかして如来は常住にして、これを救済したまふこと、佛在世と何の変りもない。

『佛かねてしろしめして煩悩具足の凡夫と仰せられたること』が、即ち如来常住の声である。『阿闍世王のため』と仰せられた佛語そのままである。

吾人過去をかへりみるに、人生まことに変化が多い。しかし不思議にも、如来常住の声は、萬古不易なることを事実に示現したまふことが、まことに感泣に堪えぬ。

佛涅槃の会坐において、悲歎、号泣せる佛弟子は、また如来常住の遺訓に感泣したのである。

釈迦如来かくれましまして、二千余年になりたまふ
正像の二時はをはりにき、　如來の遺弟悲泣せよ。
像末五濁の世となりて、　釈迦の遺教かくれしむ
彌陀の悲願ひろまりて、　念佛往生さかりなり。

長生不死の神方

花田正夫

他力の大信心を親鸞聖人は信巻のはじめに十二通りに讃歎してゐられますが、その最初に『大信心は長生不死の神方なり』と称揚して居られます。講者方は、この一句は曇鸞大師の御こころによられたものであると説いて居られます。

超世無上に攝取し、　選択五劫思惟して
光明壽命の誓願を、　大悲のもととしたまへり。

本願招喚の声は、常に我等を呼びたまふのである。変化多き人生に対して、大悲の惠みは少しも変ることはない。『佛かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたる佛勅』を聞かねばならぬ。此招喚の声に目醒めねばならぬ

幸に一たびこの佛勅を聞きたるならば、心光攝護の中に住してのがるることは出来ぬ。如何に誘惑が来るも、迫害が来るも。世間の風波が來るとも、外界の動乱があらはるるとも『一心正念にして直に来れ』の如来常住の声は、常に響き渡りてある。

昭和五年三月、信界建現、第三号。

さて大師の故事は誰にもよく知られて居ります通りに、支那の五台山の近くに今から千四百年程前にお生れになり、若冠十五、佛道に入られまして長年四論宗を学ばれたのであります。ところが五十歳近くになられて、佛典中で特に大部な経典とされて居ります大集経の読破に取りかかられたのでありますが、不幸にも病魔におかされました。そこで大師はあらゆる養生生活を続けられてやうやく恢復せられましたものの、このことによりまして、大部な大集経を究めつくすには先づ不老長寿の道を得なければならぬと思ひ定められて、遙か遠くの江南の地に陶隱居といふ仙人をたづね、その道術を学び終へて仙経十卷を得て帰られたのであります。

その頃、大師は印度渡來の高僧、菩提流支三藏にめぐり遭はれましたので、事の顚末を詳しく物語り、佛教も長生の法が説かれてをりませうか、とたづねられたのであります。

大師の斯うした考へ方や、その行動は、極く世間の一般的な考へ方でありまして、殆んど皆がさう思ひ、さうするのであります。然し三藏法師にはそのことが如何にも憐れで〳〵ならなかつたのでありませう、切角長年月佛道を学びつつもそこに佛智のひらめきがちつとも見られない、佛意から遠くそれてゐるのを見拔かれたのでありませう、大師の物語を聞くや否や、如何にもいまいましい、歯がゆいといふ御姿で、大地に唾を吐き捨てられて大叱責をせられ最後に浄土の経典を渡されたのであります。これは所謂苛責慈悲でありまして、きびしく叱り強く叩いて、しぶとく、なまぬるい心を喚びさまして下さる慈悲であります。またこの時渡された経典は、或は観無量壽経であるとも、或は浄土論であつたとも伝へられて居りますが、確実なことはまだ分つて居りません。

大叱責を蒙つて大師はひとすぢに浄土の経典を播かれ、遂にからりと夢からさめたやうに信眼がひらけ來つて、攝取心光の照護の下に、仙術の経はながく無用となられたのでありました。それは長生不死の神方がひらかれて、不老長壽の仙術が自然に無用となられたので、恰も太陽が大空に照り輝いて、燈火がその光力を失つて無用となる如くであります。

さて不老長壽と長生不死とは文字がよく類似してゐて混同され勝でありますが、そのけじめを申しますと、不老長壽の仙術とは、人壽百歳を完うして、然もよれ〳〵に老耄するのでは所詮がありませんから、何時までも矍鑠として暮せる仙人の健康法であります。昔秦の始皇帝が不老長壽の霊薬を求めたといふ故実は誰も知るところであり、誰も願ふところであります。

長生不死の神方とは、五十年、百年の人生の長短を言ふのではありません。もとより短命より長命、老弱より勇健でありたいのでありますけれど、それは願つても得られないことでありますし、よしその願が多少かなつたにしましても、罪悪深重、煩悩熾盛の身には、はてしのない生死の苦海に、無明の大夜を彷徨する域からはすこしも脱れ出ることは出来ません。更に痛ましいことは苦海を苦海と知らず、無明を無明とさとらず、何時もわれかしこしと思ひあがり、何時かは楽果を得られるかに夢みて、性こりもなく見はてぬ夢を何処までも、何時までも追うて行くのであります。法華経の火宅三車の譬喩の中で、火焔は燃えさかり棟は傾き危機は迫つてゐるのに、其の火宅の中にあつて『嬉戯に楽著して、覚えず、知らず、驚かず、怖ぢず、火來りて身を逼め、苦痛已をせむれども、心厭患せず、出でんと求むるこころ無し』とありますが、これこそ私共の煩悩生活の如実な佛智の照見であります。嘆然し佛陀の大悲大願はここに発起せられたのであります、煩悩に酔ひしれて、出でんと求むる心無き者のために、即ちたすかるよすがの絶えて無い者のために、その者をこそたすけ、必ず浄土に迎へずばやまじとの大願が成就せられたのであります。この大願にめざめる時、無明の闇が破られて、浄土への道がひらけて、長生不死の不思議な道の味ひを得るのであります。

父王を殺害し五逆の罪にめざめて大煩悶におちた阿闍世も、『阿闍世のために涅槃に入らず』との佛陀の大悲心に遭ひ、おへだてのない広大な御眞実心に浴して『世尊よ！私は今無根の信を得ました。今が今まで私は佛を尊ばず拜まず信ぜずの暗い生活をして居りました。今初めて佛心のまことに催されて佛を知り佛を拜む喜びの身となりました云々』と歎じ、韋提希夫人に向つては

『我今、いまだ死せずしてすでに天身を得、短命を捨てて長命を得、無常身を捨てて常身を得たり云々』

とその内に溢れる喜びを吐露して居ります。無根の信、如来よりたまはる他力の大信心の開発をきざみとして、永生の楽果である浄土往生の道がひらかれ、佛光に照護せられて念佛成佛の白道の旅人として下さるのであります。その信の風航を歎異抄十五條に

『いかにいはんや、戒行、慧解ともに無しといへども、彌陀の願船に乘じて、生死の苦海を渡り、報土の岸につきぬるものならば、煩悩の黒雲はやく霽れ、法性の覚月すみやかにあらはれて、尽十方の無碍の光明に一味にして、一切の生を利益せんときにこそさとりにては候へ』

と、流転三界の生が、往生成佛の生に転成せられる趣を讃歎して居られます。これが即ち『大信心は長生不死の神方なり』と仰せられるいはれでありませう。

我聞如是

実のところを白状いたしますと、私自身は長年聖人のこの仰せを、而も大切な信の卷の端初に『長生不死の神方』と掲げて下さつてゐたのに、読んで読まず、聞いて聞かずと云ふ工合に、読みおとし、聞きおとして参りました。ところが、難治の心臓病の四年半を過して参り、病苦のとりことなり、その彼方に私自身の死の墓石を感じ始めましたにつけて『お浄土に生れさせて頂ける』といふことが、然もそれを佛様がお誓ひ下さるといふことが、大きな燈炬として私の暗黒の胸を照破して下さるのであります。そこに私自身の死の帰するところが存し、同時に現在の生の依る所が拓けるのであります。

もとより煩悩の興盛の私には見るもの聞くもの皆生死のきづなにあらざるはなしで、浄土に生れさせて頂くことをよろこび願ふといふ心はすこしもおこりませんが、名残り惜しく思へども娑婆の縁つきて力なくして終る身を、かねてしろしめし、ことに憐み給ふ大悲に支へられて、そこにかかる浅間しき身にゆるぎのない唯一無二のよるべを頂くのであります。

私はここに『孤独者の合掌』といふ本の著者、西山氏が死の間際まで歌ひ続けてよろこんだ『雀の唄』を無限の懐しさをもつて想ひ浮べます。その歌は

雀、雀、今日もまた、暗い野路をただ一人
森のむかふの鍛かけの淋しいお家へかへるのか
イエ、イエ、皆さんあそこには
父さんも、母さんも待つてゐて
たのしいおうちもありまする
今日は皆さん　チユ　チク　チウ

暗い淋しい人生の野路山路をこえて行く旅ではありますけれど、そこにはお浄土がある、そのお浄土へは何時でも何処からでも生れさせて頂けるのであります。無始流転の生命を、往生成佛の生命と転成して下さるのであります。

完

願成就文に就いて

福島政雄

昨年の十月以来七ヶ月振りにお目にかかりますと思ひます。その間私の身辺にも色々の事がございましたが、まあこの七ヶ月振りにここでお目にかかれますことが大変有り難いことと思つてゐます。今迄にこの集りに大無量壽経の上の卷、まことに不十分ながら上の卷のお話を申し述べました。今晩からこの下の卷にはいりますのでありますが、下の卷の一番始めにありますところの願成就の文と云はれてあります、そこに就いて私の心持を申し上げてみたいと思ふのであります。

願成就の文は御承知の通りに極く短いものでありまして一寸読んでみます

『佛阿難に告げたまはく、其れ衆生有りて、彼の国に生ずる者は、皆悉く正定之聚に住す。所以はいかん、彼の佛国の中には諸の邪聚及び不定聚無ければなり。十方恒沙の諸佛如来、皆共に無量寿佛の威神功徳不可思議なるを讃歎し給ふ。諸有の衆生其の名号を聞きて、信心歓喜し乃至一念せん、至心に廻向したまへり、彼の国に生れんと願ずれば、即ち往生を得、不退転に住せん。唯五逆と正法を誹謗せんとをば除く』

これ文が御承知の願成就の文であります。一体この願成就と云ふのはどう云ふ事であるのか、我が身の上にふり返つて考へてみますのでありますが、これは上の卷で申し述べて来ました通り、如来浄土の因果と申しますか、阿彌陀如来が四十八の願、それも十八願を中心とする四十八の願を建てられ、兆載永劫といふ長い間の御苦労をなされて、そこに建立されたのが浄土であるといふことになつて居ります。そのお浄土といふものは前にも申しました事と思ひますが、なるほどその浄土はこれから西の方十萬億の佛土を過ぎて世界がある。名づけて極楽といふといふ様なことが、阿彌陀経にあります様に、西の方、十萬億土の彼方と云ふ様な事をさし示されてありますが、それは私共がさういふ風にして導かれないと、どうしても浄土の広大無辺な

といふ事を一口に云はれても、なかなかうなづけないもの、でありますからして、斯う云ふ風に、西の方、十萬億の佛土を過ぎてと云ふことを云つて下さるのであります。

その佛のお淨土といふものは上の卷にもあります様に、恢廓広大、実に限りもない広大なる世界であると、かういふことであります。

そこで私共が唯その佛様、そのお淨土と云ふものを、何だか自分の外にある、何か舞台でも見てゐる様な気持になつて、西の方、十萬億の佛土を超えて行くとお淨土に行けるのだと、頭で考へましたのではお淨土といふものの味ひがわかりません。前にも申しました様に、さういふことでなくて、その佛のまことと云ふものが、そこの中心でありますから、その佛のまことを、私共が、わが身に受けると云ふ事になりますと、佛のお淨土といふものがそのままにうなづける様になります。そして譬へて申しますならば、西の方、十萬億の佛土を過ぎてと云はれると、何か一直線に只西の方に向つて限りもなく行く様に聞えますけれど、そこは佛の世界と云ふものは非常に微妙になつてゐる事と思はれるのでありまして、私共が一直線に進んでゐる積りでも、それは何時の間にか、まん圓いまどかな、佛陀は圓満大悲の方といふ様なお言葉もあります通りに、何時の間にか、まん圓い世界に導き入れられて行つてゐる。そしてまん圓い世界といふたとへは、透き通つた玉の様に考へて見ますといふと、私共がその玉の中心に立つ時にどうなりますか。その玉の中心に立ちますとその玉のどこから来る光も、どこから及んで来る力も、私一人の上に降り注いでまゐります。

そう云ふ風でありまして今この上の卷で佛のお淨土の事を色々に云つてありますが、それがこの願成就の文といふところで、丁度私が透き通つた玉の中心に立つてゐるかの様に、そこに立つて、佛のまことを中心とする所のお淨土の様々の光なり、様々の力なりを我が身一人の上に受けるといふ事になりますのがこの願成就の文の味ひである、つまり佛様のまことがその圓満なる佛の世界の中心に立たせられた私にとどいてゐる。私の方から云へば佛のまことが身にしみ心にうなづける、かういふ事になつて来た、その有様が願成就といふ所であるとかういふ風に私には考へられますのであります。

さうしますとこの願成就の文といふ所が非常に大事な所になるのでありまして、上卷全体をしめくくつてそれが私の問題になる、又私の問題でありますが、それは佛様の全問題である。佛様の全生命の問題が私の問題として降り注いで来る、私の上に佛様の全生命の問題が降り注いで来ると、かういふ関係になりますのが願成就といふ味ひであります。

そして今読みました通りに、願成就といふ事に就いては

凡そ三つの事が云はれて居ります。その第一番は、その佛のお淨土に生れようとする者は皆悉く正定聚に住す、正定聚といふのは、かねてお聞きになつてをります通りに、まさしく佛のお淨土の一人にはいるに違ひないと云ふ事にきまつたものが正定聚といふのであります。

そしてここの読み方の問題でありますけれども、かの国に生ずる者はと今読みましたけれども、その佛の国に生れようとする者はと、かういふ意味あひにとらなければならぬ、これはまあ昔の御講者がさういふ事を云つておいでになります。

今私共はこの世の中にありながら、佛のまことの身に注がれるのを、十方からです、十方から佛のまことが我が身に注がれるのを感じ、わが心にうなづけると云ふ事になつたのはこの世にありながら自分が必ず佛のお淨土に生れる様になるときまつたものだと、まだ私共はこの世にゐるのであると。そしてこの世に居る間は別の事であつてそれから死ねばその淨土の一人になると、さういふ意味ぢやない、この世にありながら、もう佛の国の何と云ひますか、入学試験に及第したとでも云ふ様な事でありまして、まだその学校にははいつてゐないけれども、もうその学校にはいるものときまつたと、さういふ事でありまして、正定聚とは私共がまだこの世の中に生命を続けて居りますけれども、そのままの姿で以てもう佛のお淨土の一人に必ず加へられるといふ事がきまつたといふのが正定聚である。これはこの非常に大事な問題でありまして、何と云ひますか、この世の中にありながら、前に私が使ひました言葉で申しますならば、佛のお淨土の光なり香なりが、わが身に通うてゐるのである。かう云ふ事でありまして、そこには私共がこの世の中で苦しめば苦しむほど、そのお淨土の香、お淨土の光といふものが、いよ〳〵ゆたかに深く私の身にとどいてくるのであると、かういふ関係になるのであります。

一体私はどんな生活をしてゐるかと申しますと、毎日煩悩の生活だらけであります。昨日も腹を立てた、今日も恨み事を考へた。又愚痴な思ひが起つて来たといふ様な事で、毎日毎日を暮して居りますので、決して私共がこの世このまま立派になつてゐるとは云へませんけれども、その愚痴や腹立ちや、むさぼり、貪欲と云ふ様なもの、さういふものばかりが起り立つて居ります私に、淨土の香と云ふ様な、佛のまことであります、それが淨土の香りとして我が身に通うてまゐりますと云ふと、不思議にそこにお念佛申されると、かう云ふ事でありまして、そのお念佛の中に佛のまこと、淨土の香り、又佛の光といふものを私共が感じてまゐりますので、私共は苦しみのまん中に居りながら、そこに何となく、ゆつたりとした心持を開かれてまゐる。苦しんでゐる事は確かであります、どうかすると間違つた思ひをおこして、こんなに苦しんでゐるより、原子爆弾の

様なものでパッと一層死んでしまつた方がよいぢやないかそんな事考へる事無いぢやありません。けれどもそこが不思議なものでありまして、そんな事考へて苦しんでゐる間に、何時の間にか、お念佛の内に、佛のまこと、お淨土の香といふものが私に通うて来る、さうなつてまゐりますと何かその今死んだらよささうなと思つた自分の心にゆとりが出来てまゐります。それは事実でありまして私なんか毎日毎日のやうに、さう云ふ事を味はせて頂いて居りますのであります。そこのところがつまり、この皆悉く正定之聚に住すといふ所の味ひなのであります。

自然法爾（一）

自在丸新十郎

自然と法

自然法爾といふ言葉は、親鸞聖人が八十八歳の時に書かれた末灯鈔の中の文章の主題であることは、余りにも知れ渡つた事柄であります。從つてこれについての解釈も随分あるやに見受けられますが、その字句の解釈は別としてその意味する体験上の味ひにいたつては個々別々の様であります。祖師も亦これに対する味解を述べられたものと拜察されます。そんなことで、私も亦、私の体験を通してこの言葉を味はして頂きたいと思ひます。

一体『自然』といへば、何だか自分の前に展開してゐる総ての事物を普通に指してゐるやうであります。例へば、松や梅や楓や草花や、池や水や川や、人間や犬や猫や小鳥や、その他ありとあらゆるものが自然です。即ち『天然自然にある所のもの』といふ言葉自身が示してゐる様に、人爲が加つてゐない、ありのまゝの事物が自然であります。それ故、自分に対する総ての物質的な存在といふことになりますが、又人間の精神作用でも、それがありのままで、意志も何も加へられてゐない場合にはやはり自然の中に含まれます。そしてそれらを内容とした広い世界を自然界とよんでゐます。

自然界のこんな色々なものは、じつとしてゐないでめまぐるしく変化してゐます。太陽の運行、日や星の廻転の如き大きな変化から、物質を構成する目に見えない素粒子の運動まで、または私達の肉眼にも顯微鏡にも認められない人間の精神活動など、総ては変化であり活動であります。こんな変化や活動は、根拠や理屈など何もなくて雑然と行はれてゐるやに見えるけれども、決してさうではなく、一定した原因から一定した変化や活動が現はれてゐるにすぎません。自然科学はこんな原因結果の関係をつきとめて、その間の法則を見つけだすのが目的です。

この法則には狭い範囲だけに役立つ法則もあれば、極めて広い範囲に役立つ法則もあつて、最後に自然界すべてにあてはまる法則が見つかれば、それは真理とよばれてゐます。宛も地方地方に役立つ法律といふか取締規則があつてそれが漸次広まつて国となれば国の法律となり、国の法律は更に国際間になつてくると国際法といふものがあるやうなもので、国際法は世界全体にあてはまる法律です。

かく眞理は自然界すべてにあてはまる法則であつて、この法則に支配されないものは何一つありません。春になつて綺麗な花が咲き匂ふのも眞理であれば、夏になつて井水に冷感を覚ゆるのも眞理であり、秋になつて満山が紅葉となるのも眞理であれば、冬になつて天地が皚々たる白雪に被はるゝのも真理です。また喜怒哀樂の情が自然にもよほすのも真理であれば、三毒の煩悩にくるはさるゝのも眞理です。

このやうに自然界の種々雑多な出來事には、人爲は少しもたづさはつてゐません。即ち自然は人間のはからひには無関係に、あるがままに動いてゐるだけです。宗教ではこのやうな自然界のすばらしい不思議な現象を、人智が進まなかつた未開の時代には、そこに神の意志が働いてゐると考へざるを得なかつたのです。そして天災地変や、それによつて生じた人間の幸不幸は、皆神の意志によるものと解したのです。そしてその神の意志に逆はないやうに、またはその意志を崇拜するといふやうになつて神を祭り、自然崇拜といふことになり、多くの自然の神々をまつる多神教へと進んで行つたやうであります。また天地の創造を唯一神に帰する基督教の様な一神教もありますが、佛教はこの点神の意志といふが如きものは全く認めないのです。この点世界に全く類をみない宗教と云へます。

然らば佛教は自然を如何に解してゐませうか。自然は法則通りに変化してゐると自然科学はみてゐるが、佛教は、この法則又は眞理によつて動いてゐる自然そのものを法といふ言葉で表現してゐます。そして人間とは一応別箇のものとみなして、人法といふ言葉が使はれます。人と法とで宇宙全体、即ち自然現象も社会人生のすべての現象をも表はすのです。また一切法といふ場合もありますが、この場

合は人間は法の中に含まされてゐることはいふまでもありません。

一切法はこのやうに法則通りに変化し動いてゐますが、それは一体どんな法則に基づいてゐませうか。因といふものに縁が働くと結果が生れるといふ因縁法であります。所が一切法は因縁によつて変化し、因縁によつて活動してゐることは、変化も活動もしてゐない何ものかゝ、何処かにあつて、それが変化し活動してゐる一切法の原動力となつてゐなければなりません。宛も天があれば地があり、左があれば右があるやうに、変化の奥には必ず不動常住のものがなからねばなりません。そして始めて変化が判つて参ります。地球表面の震動を記録する地震計には、不動点があつて、それによつて地震の強弱が記録されるやうになつてゐます。

然らば絶えず変化して止まない一切法の奥には、変化してゐない如何なるものが存在致しませうか。法身と申す佛であります。一切法の本体とか本身とかいふ意味でありませうか。法身は又法身如來とも無上佛とも申します。『かたちもなくまします、かたちもましまさぬゆゑに自然とはまふすなり』と祖師も仰せのやうに、法身如來は形や肉体や精神をもつてゐません。形や肉体や精神があるならば、それは因縁法によつていつかは必ずこはれなくてはならない運命にあります。それでは『如來は常住にして変易あることなし』といふ涅槃経の言葉に反します。

法身はまた法性法身とも申します。この言葉も亦意味深重で、法性とは一切法の本性といふことです。一切法の本当の性をその本体としてゐる如来であります、一切法の本当の性質とはどんな性質でありませうか。不生不滅であり、常住であり、涅槃の如きでありませう。法身如来には生とか死とか、そんな変化するものはありません。また涅槃は燈火を吹き消すといふ本來の意味から、大変静かな意味になります。燈火が風にゆら〳〵ゆれてゐたのが、吹き消されて大変静かになつた狀態です。これは譬で、実は燈火といつたのは煩悩の火のことで、これが日々燃えさかつてゐるのが私達凡夫の実態です。これが佛智の光明によつて吹き消されて静り返ることです。親鸞聖人が無上涅槃と仰せられましたのは、この狀態をいつたもので、いはゞ無上佛の自覚の内容であり功德に外ありません。

このやうな功德を本有する法身如来は、宇宙至る所にゐられます。いかなるものも法身如來でないものは一つもありません。私共人間は勿論のこと、ありとあらゆるものが法身如来です。從て一切法はこのやうな法身が適当な縁をえて、この世に現はれて変化し活動してゐるにすぎません。

因縁にはよい因縁もあれば悪い因縁もあります。佛教では善因善果、悪因悪果、又は自業自得と申します。善い行

を積んでおけば、自然によい結果が得られ、悪い行を積んでおけば、自然に悪い結果が得られることは申すまでもないでせう。この結果は人爲ではどうにもならない、必然的結果であります。この意味で、私達は現在の結果は過去の所業が自然にもたらした結果で、人の力で以てはどうにもならぬ業報でありますから、それはそれとあきらめて、將來は必ず立派な結果を收めるやう、よい縁を充分添加するために努力精進したいものです。

私達の知り得る最も善い、また最も勝れた縁によつて、立派な結果を收めた方は阿彌陀如來です。阿彌陀如来については、大無量壽経といふ経典に詳しくでてゐるやうに、昔昔大昔の頃、法藏と申す元々国王であられた出家が、吾々衆生をもれなく済度したいと思ひたゝれて、五劫といふ地球が五回もこはれては出來、出来てはこはれる期間の間思案を回らして、善い国を設計され、兆載永劫といふ無限といつてよい永い間修行をつまれて、遂に見事な念願を果して、設計通りの極樂淨土を作り上げられました。そして自分はこゝの国王になられて阿彌陀如来と号したのです。阿彌陀如来の前身法藏沙門も、釈迦如来成道以前の悉達多も、元々私達と同じ法身如来であつたのです。それが無限に長い期間や六ケ年間の修業を縁として、かくも甚しい身分の違ひを来したのであります。このことは、私達も亦如来にならつて淨業を縁とすれば、必ず如来になり得ることを示されたものであります。從つて私達は修業して善業をつみ悪業をさけて、日一日と佛地に近づくやう努力精進せねばなりません。

ところが実際問題になりますと、それは仲々大変です。こんなことは自分で実際やつてみなければ判らぬことで、他人について唯批判する位ならば、誰にも出来さうに考へられるし、批判も酷になり勝ちですが、自分にやらねばならぬとなると仲々困難です。尤も、それは道德観念の強弱によつて違つては参りませうが、強い人になればなるほど愈々困難となりませう。法藏沙門は既にこの事あるを見越して、一切の衆生を洩れなく救済したいといふ稀有の念願をたてられた次第であります。それ故、私達は修業などは積まなくとも、たゞ如来の意趣をうけてそれに同調さへすれば、自然に、また必然に、極樂淨土に往生して、如来になさして頂くのであります。宛もそれは、法藏沙門が極樂国へ道路をきり開き、鉄道を布設して、汽関車や客車を作り上げて下さつたやうなもので、私たちは唯極樂に行きたいと思つただけで、その汽車に乘せられて夢現の間に自然に極樂国に送り屆けて頂くやうなものです。かゝる基礎工作は、ちやんと先方で長い間苦労を積んで成就してあるのです。だから私達は無為に、自然に、また必然的に極樂淨土に参らして頂くわけです。東京行きの汽車に乘せられると、いやでも応でも東京に着かしめられます。これには少

しも無理はありません。私たちはあゝだ、かうだとはからふ必要は少しもない。自然にありのまゝの姿で、思ひ〳〵の考へで、ばたばたしながら、せかせかしながら、或は喧嘩口論やりながら、或は眠つてゐようと誇書してゐようと、間違ひなく必ず東京駅につかせて下さいます。これには少しも無理がない。東京に向つて道路が出来、軌條が布かれて汽車がその上をなだらかに滑つてゐるから自然です。軌條はどうして作るか、強度はどうか、何年もてるか、汽関車の構造はどうか、どうして力が出るのか、どの位の力がどの位続くか、石炭はどうして力になるのか、そんなことは知らなくともよいのです。否知る必要は毛頭ありません。製作者や設計者に於いてそんなことは充分考慮した上で作り上げて下さつてあるからです。

御不審の方は御遠慮なく直接先生へとのことで、御住所は戸畑市中原、九工大官舎であります。

法藏沙門は、極樂行きの設計や極樂淨土の構造などについて、五劫の間も思案され、兆載永劫といふ無限の時間をかけて建設されたのです。私達の五十年や百年の壽命では思議判断されないのは当然です。たゞ私達は阿彌陀如来を信じて極樂行きの列車に乘せて貰へばよい。さすれば自然に極樂国につかして頂くのです。列車とは何でありませう。称名であり念佛です。要は南無阿彌陀佛といふ名号です。各人号を信じ称ふれば、自然に極樂国に往生させて頂けます。『信は願より生ずれば、念佛成佛自然なり』と仰せられてゐます。念佛すれば自然に極樂国に往生して、成佛させて貰へます。名号の中に、法藏沙門の大願業力といふ無限に大きな力が籠つてゐて、それが私達を強引に引つぱつて行つてくれるからです。

（未完）

名といのち

榊原德草

山と云へば、部屋の中にゐても山の姿が心に浮ぶ、花といへば、見ぬ冬の夜でも花の姿が眼に浮ぶ。だがそれがも一つはつきりと、山ならば「富士山」、花なら「桜」といへば、もつとはつきりと目の前に浮ぶのである。

さて名といふものは千差萬別であるが、沢山の名の中で

最も身近いものは何であらう。

心にその名を思い浮べただけでも、心和み、温い血の通う名は親の名であらうか。然し山々の中で富士山がくつきりと四方の山々をみ下してそびえるやうに、親の名が一番かんばしく心にかようてくるには、なかなかひまがかかる。色々の山山を訪ねたあげく、あれでもない、これでもないと、相当の年月をさ迷つた後に、山ならば富士山こそ日本一と身に感じ、その名が忘れられぬやうに、親の名が一番であることに気がついてくる。

直接目の前に見ても名がわからぬと、も一つである。この花は美しい、が然し名を知らないとなると、も一つである、ぴつたりとしないのである。

然しその名を知つておれば、たとへ直接にそのものを目の前に見なくても、名の中にその花の姿が思ひ出される、また何時かは知らされて来る。

名のみあつて、そのもののないものはない。見たこともない、また触れたこともない、そんなものがある筈がないやうなものでも、名があれば必ずそのものがある。『名は実の賓』といふ、名があれば、そのものがあり、そのものと実とは一つと言つてもいい。

親といふ名があつても只親では、もう一つである。甲の親、乙の親、私の親となつて初めてその名も生き〳〵として來る。

私の親となると又もう一つ親の名が出て来ないとしつくりせぬ。親には父と母とが分れて、父の名と、母の名が、私の父、私の母となつて出てくる。

特に父の名よりも、母の名は古往今来、人の子の続く限り、忘れ難い好き人の名、即ち母の名である。母はどうして子供達から慕はれ、その名が忘れられぬのであらう。

私が母の名を覚えたのは何歳頃か知らぬが、五十余歳の今日に至るまで、母の名はあらゆる『名』の内で、文句のない『いい名』である。慈愛と同悲そのものが母だからである。

慈愛とは、自分が完成したのを満足するに止まる所からは生れてこない。自らが完成して、他をも同じく完成させたい心からおのづから発露して来る心である。同悲とは、他の悲しみを自分の悲しみとして自他の別を越えて、これと同じて一つのうちに悲しむ心である、これ又慈愛の深まれる極りなき姿とも言へるものであらう。それらの、慈、愛、同、悲の総体を、母の名において、子は身に感ずる。だから、名一つが、それでもう文句なしに身も心も和らけあたためてくれるのである。

人が生れて死ぬるまで、何か一つ此の様な文句の無い、思い出しただけで、一度呼びたるままで、余分を領納しつ

くせる、さうした好き名を持つことが出来れば、その人は幸福者である。倖せ者と呼ばれる人々には種々の類型があるであらうが、その中で最も倖せ者とは好き名を身に体してもつてゐる人のことであると云へる。

今次の大戦に私も中支の戦線に駆り出されてゐた或日、弾丸雨飛の中のことだつた。前進中は話したり、笑つたり人が集れば、女のみでなく男ばかりの戦地も騒しいものである。所が弾の雨ふる中に立つた時、一切の役に立たない声は沈黙してしまつた。ただ弾の音だけである。隊長の号令だけである、声もなく名も消えて、ただ死の恐怖におののくのみになつた。

戦闘が一時終つて、負傷者、重傷者が担架で運ばれてゆく、それを見る者は声もない。

重傷の担架に横倒れる者の口からは、うめき声がきこへる、その苦しみの底から時折り呼ぶ名は『お母さん』、『おじさん』である。或者は『南無妙法蓮華経』であつた。死に直面して、苦しみにうめいて、其所に呼ぶ名がある者は幸せである。

然し、若し、この名が、私達の永遠の中から、三世を貫いて呼び得る名であれば、これに超した名はない。

も一つこれを深めて、若し私が呼ばなくても、思ひ出さなくても、名の方から、常に私を覚えてゐて下され、呼んで下さることが、もう何の屈托もなく信頼できてゐるならば、いやその信頼さへも私が努めてするのでなくて、名の方から私に信頼しきつて止まない、たとへば親が私を忘れないやうに、私は忘れてゐても親が忘れないでゐることに気がつけば、もう大丈夫である。こんなやすらひはない。

この永遠無窮の親の御名が、南無阿彌陀佛である。お念佛である。

慈光第七卷第一号昭和三十年月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物十認可

昭和三十年一月十五日印刷
昭和三十年一月十五日発行
定価十七円。半年分百円。一年分二百円。
名古屋市南区駅上町二丁目二八番地
編集兼発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八番地
印刷人　奥川正生
名古屋市南区駅上町二丁目二八番地
発行所　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番